

東大を去るにあたって

桐村 康子 (数学教室)

東大での勤務もあと1カ月半となった今、ふと思い出したことは、昨年夏ごろだったでしょうか、大図書館の横の道、弓道場側の木かげを歩いていたら、理学部を退官されたK先生にお目にかかり、御挨拶すると「あなたはまだいたんですか」と仰言る。「はい、来年の春には定年でございます」。「そうですか、僕はもう卒業しましたよ」と先生は独特のはにかんだような微笑をうかべて去ってゆかれたこと。

過ぎ去った年月、この目まぐるしい世の中からちょっと奥に入った静かな大学で長い留年を続けていたようで、物理教室から数学教室へ転科して見たり、さして立派な成績もとらずに卒業が目前にきてしまったという感じです。本年度の学生の卒業式がすんだら、私もほんとに実感が湧いてくるかもしれません。あまり長く居つづけたので、何時までもこの生活が続くような錯覚からか、不思議なくらい切実に感じられないのです。

卒業後の青写真もないわけではないのですが、それもまだ何となくよそよそしく、何冊ものアルバムをめくっている此頃です。

勤務したばかりで、それこそ右も左もわからない者を辛抱づよくお使い下さり、不幸の折には一方ならぬ助力と暖かいお心づかいを頂いた物理の小谷教授をはじめ諸先生方の思い出、数学に移り、全く経験のなかった教務の仕事をした

どたどしく始めた頃、いつもおだやかにお導き下さいました弥永、河田両教授をはじめ数学の諸先生方の思い出、これまで一緒に働いてきた大勢の職員の方々との思い出。それらは、これらの生活の中でどんなにか、私を暖めてくれることでしょう。

東大の戦後40年間の歩みの時期を、殆んど共にすごし、その発展の歴史と、学問に専心される多くの研究者の生活を目のあたり見ることのできたのは、私にとって感銘深いことでありました。

構内のたたずまい、三四郎池のほとりの木立の四季の姿、けやき並木の冬のアーチ、秋の終りを華やかにかざる正門の銀杏並木や、あちこちに一本ずっしりと立っている大銀杏の黄葉の美しさを年ごとにあきることなく眺めてきました。この自然の姿が何時までも変ることのないように、かけられた東大の理想も、現実も世の汚濁にまみれずに続いてゆくことを祈っております。

又去るにあたりまして、私のような者に寛大なお計らいを賜りました有馬理学部長、数学教室の諸先生に心から感謝申し上げます。ならびに長い間御盡力下さいました大勢の理学部職員の方々に御礼申し上げます。この多数の方々の御好意を忘れることなく、これからの日々を生かして行きたいと存じます。

